

論文の要旨

論文題目 日本語学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移
格助詞「に」と「で」の使用を中心に
氏名 蓮池 いずみ
学位 博士（学術）
授与年月日 平成20年6月30日

日本語の格助詞は、多くの日本語学習者にとって使い分けが難しい学習項目の一つである。中でも、空間を指示する格助詞「に」と「で」は使用される場面が類似しているということもあり、両者の用法を混同した誤用がよく観察される。日本語の格助詞の習得を調査したこれまでの研究では、学習者が空間を指示する際に、特に「に」を多く使用する傾向があることや、直前の名詞と特定の格助詞を結び付けて記憶する傾向があることなどが報告されているが、これらの使用パターンは異なる母語背景をもつ学習者に共通する現象であるか否かについては十分な検証がなされていない。一方、英語の空間表現習得に関する研究では、学習者が空間を指示する際に前置詞 in を過剰に使用する現象や、前置詞の脱落などの現象が学習者の母語背景と相関があることが報告されている(Schumann, 1986; Jarvis & Odlin, 2000)。これらの研究では in の過剰一般化や前置詞の脱落を「簡略化(simplification)」の一種であると位置づけており、学習者の空間表現使用において観察された特徴は、簡略化と言語転移が相互に作用し合った結果生まれたものであるという仮説が立てられている。この結果は、日本語の空間表現の習得においても学習者の母語背景の違いが大きく関わっている可能性を示唆するものであるといえる。そこで本研究では、日本語学習者の空間表現使用における母語の影響を明らかにすることを目的とし、異なる母語背景をもつ複数の学習者グループを対象に、調査1(場所を示す格助詞選択ストラテジーに関する調査)、調査2(空間表現使用における母語の影響に関する調査)の2種類の調査を行った。各調査の概要は以下の通りである。

【調査1：場所を示す格助詞選択ストラテジー】

日本語学習者が場所を示す格助詞「に」や「で」を使用する際にどのような助詞選択ストラテジーを使用しているかを明らかにすることを目的とする。日本語教育機関に所属する中級レベルと上級レベルの韓国語母語話者と中国語母語話者計120名に対し、格助詞の穴埋め式選択テストと2種類の内省調査を実施し、格助詞「に」の過剰使用の傾向や助詞選択ストラテジーの影響の有無を分析した。また、日本語の場所を示す格助詞と韓国語の格助詞との対照分析を行い、韓国語母語話者の助詞使用における母語転移の可能性を探った。

【調査 2 - 空間表現使用における母語の影響】

調査 1 によって得た考察を踏まえ、学習者が日本語で空間を示す際に現われる母語の影響を実証する目的で行われた。調査 2 では特定の現象が母語の影響であるか否かをより正確に判断するために、調査 1 の方法に、「被験者の母語の種類」、「日本語能力の統制」、「母語と中間言語の比較」、「タスクの種類」の 4 つの面において改善を行った。被験者は日本語教育機関に所属する韓国語、中国語、英語を母語とする学習者計 97 名で、日本語能力の上位群（中上級）と下位群（初中級）に分けられる。調査では、計 3 種類のタスク（絵を描写するタスク、助詞の穴埋め式選択テスト、文法性判断テスト）を実施し、言語産出の自由度の高いタスクと低いタスクの比較を行うと同時に、言語運用とメタ言語判断の両面から学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移の現象の観察を行った。

本研究の主な研究課題は以下の 3 点である。

- (1) 先行研究で指摘されている格助詞「に」の多用傾向や「位置を表す名詞+に」のような名詞と格助詞をひとまとまりで記憶するストラテジーの影響が母語の異なる学習者に共通して現われる現象なのかどうかを検証し、それらの現象が生み出される要因を分析する。
- (2) 学習者の空間表現使用における「簡略化」と見られる現象と、「言語転移」と見られる現象を記述し、両者がどのように作用し合っているかを考察する。
- (3) 異なる種類のタスクにおける学習者言語を比較し、タスクの種類により簡略化や言語転移の現象の現われ方が変化する可能性について検証する。

以下に、調査の結果から得られた結論を、(1)簡略化、(2)言語転移、(3)簡略化と言語転移の相互作用、(4)助詞選択ストラテジー、(5)中間言語の可変性の 5 つの観点からまとめる。

(1) 簡略化

調査 1 及び調査 2 の全てのタスクに共通して、特に中国語母語話者に格助詞「に」の過剰使用の傾向が観察された。この傾向は中国語母語話者の中でも日本語能力の低いグループに著しいことから、「に」の過剰使用は第二言語の発達過程の初期から中期にかけて現われる「簡略化」の一つであると考えられる。中国語母語話者による「に」の過剰使用は、学習者が中間言語を目標言語に一步近づけるために仮説検証をする過程で現われる現象であると捉えられることから、簡略化の中でも Meisel(1980)の提唱する「精緻的簡略化 (elaborative simplification)」の例であると考えられることができる。また、調査 2 のタスク 1 では、韓国語母語話者と中国語母語話者が空間を指示する際に、助詞「は」を高い頻度で使用することがわかった。両グループとも助詞の脱落の回数は少なかったが、助詞「に」や「で」を使うべきところであえて省略し、代わりに「は」で主題化するという過程に注目すると、この「は」の多用は学習者がコミュニケーションの促進を目的に文法を変形させ

る「制限的簡略化(restrictive simplification)」の一つである可能性があるといえる。

(2) 言語転移

韓国語母語話者は、調査 1 及び調査 2 のタスク 2 とタスク 3 において助詞の使用が比較的正確であり、「に」の過剰使用が見られなかった。これらの結果は、日本語と類似した空間表現が存在する韓国語からの正の転移によるものであると推測できる。一方、調査 1 の問題別分析では、母語と日本語の格助詞との間に用法のずれがある場合は正答数が低くなる傾向があり、こうした負の転移の一部は上級レベルになっても残る可能性が示された。また、調査 2 のタスク 1 では、韓国語母語話者にも「に」の多用傾向が見られたが、これは母語からの直接的な転移によるものであると考えられ、中国語母語話者による「に」の過剰使用とはその要因が異なる可能性が高いといえる。

中国語母語話者は全ての調査に共通して「に」の過剰使用の傾向が観察され、上位群、下位群ともに格助詞の習得レベルが低い傾向があった。中国語では場所を示す前置詞が「在」一種類しかないうえ、「在」を用いずに語順によって空間を指示することも可能であるため、その影響で日本語の格助詞「に」や「で」の使い分けに意識が向きにくいという可能性が考えられる。一方、調査 2 のタスク 1 では、中国語母語話者には「に」以外に助詞「の」を比較的多く使用する傾向が見られたが、これは中国語の「的」を日本語に置き換えた直接的な転移であると推測できる。また、中国語のデータには語順によって場所が示された場合の前置詞の脱落も多かったが、L2 データではこれはそのままの「脱落」ではなく、助詞「は」の使用として現われた可能性がある。

英語母語話者による日本語の空間表現の使用には、中国語母語話者と類似した傾向が見られる一方で、助詞の使い分けという点で中国語母語話者よりも正確であるという特徴があった。英語では空間を指示する際に複数の前置詞を使い分けるため、その母語における習慣が日本語の場所を示す格助詞を使い分ける際に影響し、格助詞「に」や「で」の使い分けに注意を向ける傾向があるのではないかと推測される。また、タスク 1 において、英語母語話者は「に」と「で」以外の空間表現をほとんど用いなかったが、これは母語である英語において、空間を指示する際に基本的に前置詞の省略が不可欠であり、「の」にあたる表現の使用や主題化が不可能であることが影響していると考えられる。従って、英語母語話者の日本語の空間表現使用には少なくとも間接的に母語からの転移が現われていると判断できる。

(3) 簡略化と言語転移の相互作用

まず、簡略化の一つである格助詞「に」の過剰使用の傾向は、英語母語話者よりも中国語母語話者にその傾向が著しいことがわかった。これは母語の空間表現において単一の前置詞しか用いられない中国語母語話者は「場所を示す助詞」を「に」という一つの形式に結びつける傾向が強いということを意味していると思われる。従って、「に」の過剰一般化

の現象とその度合いには学習者の母語背景が深く関わっているということがいえる。また、もう一つの簡略化の例である「に」や「で」の省略とそれに代わる「は」の使用に関しても、主語卓越言語を母語にもつ英語母語話者には見られず、母語が主題卓越言語である韓国語母語話者と中国語母語話者のみに観察されたことから、学習者の母語背景が第二言語の空間表現使用に反映された結果現われた現象であると考えられる。従って、本研究において観察された二つの簡略化は、学習者の母語における空間指示の方法が直接、あるいは間接的に日本語の中間言語に反映されたものであると考えられ、本研究の結果も、言語転移と簡略化が相互に作用し合い、学習者の第二言語における空間指示の選択に影響を及ぼし得るという Jarvis & Odlin(2000)らの主張を指示するものであるといえる。

(4) 助詞選択ストラテジー

調査 1 では、韓国語母語話者には母語からの類推によって助詞を選択する傾向があるのに対し、中国語母語話者のうち特に中級レベルの学習者には「に」の過剰使用の傾向が見られた。そこで、中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジーに注目し、「に」の過剰使用と「名詞+助詞」のユニット形成ストラテジーとの関連性について考察した。その結果、中国語母語話者には「位置を示す名詞+に」のユニット形成の傾向はあるが、「地名・建物を示す名詞+で」のユニット形成の傾向は見られず、特定の動詞や名詞を「に」と結びつける学習者のストラテジーが「に」の過剰使用を引き起こしている可能性があることがわかった。調査 2 のタスク 2 では、中国語母語話者には名詞の種類に関わらず「に」を過剰使用する傾向が見られる一方で、英語母語話者に「名詞+助詞」の助詞選択ストラテジーに依存する傾向が見られた。この結果は、特定の名詞や動詞と助詞とのユニット形成ストラテジーの使用は異なる母語をもつ学習者に共通する現象である可能性を示唆する一方で、学習者の母語背景によりその使用傾向が異なる可能性を示すものである。

(5) 中間言語の可変性

本研究では、異なる種類の複数のデータ抽出方法を併用した結果、学習者の中間言語がタスクの種類によって変異する例が観察された。調査 2 で行った絵を描写するタスクでは、「に」と「で」以外の空間表現の使用が許容された結果、中国語母語話者に「の」や「は」の多用の傾向が見られるなど、助詞選択テストや文法性判断テストのように学習者の言語産出が制限されたタスクでは測れない中間言語の側面が明らかになった。また、韓国語母語話者の負の転移と見られる現象が言語産出の自由度が高いタスクで顕著に現われたことは、言語転移の現れる度合いがタスクの種類より変化する可能性を示唆するものであり、学習者の中間言語の様相を理解するためには、異なる種類のデータ抽出法を使用し多角的に調査、分析を行うことが重要であることが改めて確認された。